



佐伯通信 第52号
発行 佐伯泰英事務所
担当 文藝春秋
禁・無断転載

庭先理容院、開店

月に三、四度のペースで熱海から東京の事務所に出かける。それが三月初旬から三月以上も熱海に籠り切った。コロナ禍の蔓延のため「スレイ・ホーム」なのだ。とはいえライフスタイルが変わったわけではない。仕事の合間に朝晩、みかんの散歩に出かける、これが日

課だ。熱海にいななければならないで厄介が生じた。この十年あまり、ヘアーカットは東京の理容院と決まっていた。それが東京に行けなくなったので、伸び放題の頭になった。二段カットというのか、頭の両側と後ろはごく短く、天頂部だけつむじに合わせて伸ばしている。やはり慣れた理容師さんに任せておけるのは安心だ。だが、理容師と客はどうみても「濃厚接触」だ。となると、自分でやるかと不器用極まりない私が決断し、娘に電気バリカンを買

佐伯泰英／近刊のお知らせ

2021年1月 上旬	11月 10日	10月 8日
《文春文庫》 新・居眠り磐音 『幼なじみ』（仮）	《文春文庫》 新・酔いどれ小籐次 『青田波』	《光文社文庫》 新・吉原裏同心抄 『乱癒えず』（仮）

※発売日は予定です。

《文春文庫》 居眠り磐音 〔決定版〕 順次刊行！	8月5日 ③『姥捨ノ郷』 ③『紀伊ノ変』 9月2日 ③『一矢ノ秋』 ③『東雲ノ空』 10月7日 ③『秋思ノ人』 ④『春霞ノ乱』
-----------------------------------	---

小籐次にも給付金!?

文藝春秋文庫
「酔いどれ小籐次」「居眠り磐音」シリーズ担当 瀬尾 巧

読者のみなさま、『鼠異聞』をお買い上げいただきありがとうございます。いつものように久慈屋の店先で包丁研ぎに精を出す小籐次の前に、唇に紅をさし、小顔で色白、伽羅の香り漂わせた青年が現れます。10両の大金とともに、見事な懐剣の研ぎを願った青年は何者なのか？ ぐんぐん剣の腕前を上げ成長した駿太郎の活躍、そして小籐次の新技(!?)とともに、どうぞお楽しみください。

さて、今年の春は、新型コロナウイルス感染症拡大により自粛の日々でした。編集部は少人数の当番制となり、慣れない自宅仕事に四苦八苦の連続。見えないウィルスの恐ろしさを痛感しました。況や医学が発展途上だった江戸時代は、恐怖や混乱も桁違いだったでしょう。小籐次の半生でも、「谷風」「お七風」などと名がついた「風邪」（おそらくインフルエンザ）や、麻疹が何度も大流行しています。鰻屋や蕎麦屋、芝居小屋、風呂屋、髪結床、遊郭と、都市ならではの「濃厚接触」の商売が不況に陥り、葉や野菜・干物などが高騰。庶民の苦境に、幕府は、日雇い労働者に対して、独身者は300文、2人暮らし以上は1人250文ずつ配ることを決めます。そうです、江戸にもあった「特別定額給付金」！ もっとも、棒手振りの1日の儲けが400文程度でしたから、額は心許ないですが……。

みなさま、小籐次の活躍を楽しみながら、コロナ禍を乗り切りましょう。

近刊・作品情報はこちらでもチェックできます。

<http://www.saeki-bunko.jp> 佐伯泰英 ウェブサイト 検索

2020年の「佐伯通信」は、佐伯泰英事務所が株式会社、株式会社文藝春秋の協力のもと発行します。

新酒番船

しん しゅ ばん ふね

「佐伯通信」第53号は、10月8日刊行予定の『新・吉原裏同心抄 乱癒えず』（仮）（光文社文庫）に入ります。

うように命じた。この新兵器でもみ上げからカットを試みるがとても難しい。二段カットに失敗したら、よし、六十年かぶりに坊主頭にするとの覚悟で、庭に床屋を設えた。慌てたのが熱海の惜憐荘の管理や庭の掃除をするAさんだ。「先生、坊主はいけません。わたし、子どもたち三人の髪をカットしてきましたから、わたしがいります」と私から電気バリカンを取り上げた。子どもたちはもはや三人ともに社会人だ。娘さんのヘアーカットは今もAさんがやって

いるそう。本の表紙の私の頭を見ながら実に器用にカットしてくれた。その直後のことだ、電気バリカンが売れているらしく品薄との新聞記事を読んだ。考えることはだれも一緒らしい。当分庭先に開店するA理容院で世話になることになりそう。

散髪をうけながらコロナ禍が収束しても世界がもとに戻ることはない、すべてが変わるなど考えた。

世界を元気にする快作 絶賛発売中!

新酒番船

しん しゅ ばん ふね

江戸へ新酒を届ける競争に参加した若者を描く青春時代劇誕生!

出版社からのお知らせ 光文社文庫